堀田善衛著
海鳴りの底から

古庄ゆき子

これは、日本の中世末、近世初頭の時期に行われたキリシタン弾圧を受けて立った島原天草の大衆蜂起を描いた歴史小説である。

しかし、歴史小説と言えば即鷗外のそれ芥川のそれを思い浮べることしかできないわたしなどには、読み終るまで、まるで予測もつかない作品であった。

鷗外が歴史の自然を描くことを意図し、芥川が自己の似顔を平安末期の人物に写したものであろうと、そこで中心となっているのが個人であることには少しも変りはない。

しかし、歴史小説にはこれ以外の道があるはずだし、なければならないと思う。

例えば平家物語のように、個人をも呑み込んで旧時代が没落し、新時代の胎動する時代の様相、その中における多くの人間―単に量的に多いと言うことでなしに、置かれた地位・身分・立場・階級等を異にし、従って時代の課題に対するさまざまな担い方をもった人間群とでも言うべきもの―のそれぞれの目を通して多元的に描いた作品の系統を考えてみてもよいだろう。

私小説と言わないまでも、ある個人を主人公にした小説になれ切っているわれわれは、集団を多元的に把える平家の方法はつい忘れ勝ちであるが、時代の変革期に生きて、既に私がそのまま独立した人格として存在し得なくなっていることをいやでも知らされている（戦後文学のもっとも大きな課題が私小説の克服にあったことを思い出してほしい）現在こそ、むしろ積極的にこの平家物語の方法を取り出してみるべきではなかろうか。

堀田氏はこの方法―複数の視点による多元的方法―で歴史小説「海鳴りの底から」を書いた。もちろん私は氏が「平家物語」の影響を受けたなどと言うつもりでは毛頭ない。

「海鳴りの底から」は一九五一年「広場の孤独」をひっさげて登場して以来、「時間」「歴史」「記念碑」と常にアクチュアルな課題を自分の文学上の課題とし、現代史を収斂する文学をつくること、創作方法として複数の視点による多元的方法とを志している作者堀田善衛氏には当然の帰結と言うべきなのである。

そして、その必然的帰結が「平家物語」の流れを汲むことになっている点にこそ興味深い問題がある。

まわり道になったが、歴史小説「海鳴りの底から」はテーマ・形式ともに注目すべき作品であり、作者の今までの課題のすべてがぶち込まれており、その意味からは一応の集大成とも言うべき作品である。（その事と、作品としての完璧さを持っているかということは別である）

まず形式について考えてみると、島原・天草の村々の庄屋をも含む各階層の農民、土着武士、医者、そしてはるばる種子島からはせ加わった小西の遺臣たちといったキリシタンや、神主、果ては高野山で剃髪謹慎中のいわゆる黒田騒動の元兇であった元黒田家老を含む多くの立帰り者、非キリシタン（多く教仏徒）等々三万七千人がさまざまな過去、現在を負いながら、一揆とい

う政治行動につながって原城址へ蝟集し、新しい原城を形成、権力側の戦いの果てに全滅させられていく過程を、これらさまざまな人間の目を通して描いていくのだが、特に注目すべきは作者がこの複数の視点による多元的な方法を一撓側だけでなく、権力側にまで持込み、原城攻撃の権力側の内部矛盾をもえぐり出している点である。私は又ここで「平家物語」を思い出す。少々残念だが、権力側を描く時が「反乱軍」を描く時よりずっと不明確だという点まで似ているように思う。しかし、ともあれ両者が権力側の内部を「反乱軍」との攻防戦の中で把えることができたのは複数の視点による多元的方法をとっていることのためである。

ところで「海鳴りの底から」の作者はそれだけではなおあき足りないかのように、作者自身を合法的に登場させる場所をつくっている。つまりロシアの作曲家ムソングスキーの組曲「展覧会の絵」の構成にならったと作者のいう、プロムナードと名づけているエッセイがそれである。

作者はこれを作中六か所にわたって入れそのたび毎に創作の舞台裏を見せ、彼の意見をのべるのだが、これは歴史小説のもつ〝歴史其まま〟と〝歴史ばなれ〟の制約を乗り切る為の作者独自の方法のようである

これは非常に漸新な方法なのだけれども問題が緊迫したかと思われる時にこの多弁な作者がひょいひょいと割って入って来て状況を分析し、反省し一般化することに読者である私はかなり抵抗を感じないではおれなかった。

このことは作者が作品中に投げこんだテーマ、知識人の政治参加、転向の問題、芸術と政治の関係、外来思想の土着化の問題日本人の武器感覚の問題、権力の非人間性の問題、庶民の無党派的立あがりの問題等々が一つの溶鉱炉で鋳直されないで、混合の状態でごろごろしている感じを与えることとも深くかかわっていないであろうか。

作中の人物某々は、作者から性格づけをされた時、作者とは独立に新しい状況を来る可能性を持ってしまうはずである。

新しい形式の歴史小説ではあるが、その新しい形式こそ彼の伽ではなかろうかと考える。

しかしそうは言っても、常に現代日本のあるいは世界に生きる人間のアタチュアルな課題を日本の文学上の課題としてきた作者が、「現代の『自然』に足の裏をべったりとつけて」「歴史のなかの『自然』が現代のなかの『自然』といかに揉みあい、矛盾しあいあるいは競合し、戦うかという点」を追求した力作であることは確かである

（朝日新聞社刊五三〇円）

（別大　文学部講師）